

LAMPIRAN

石川啄木

一握の砂

あさ風が電車の中に吹き入れし
柳のひと葉
手にとりて見る

神無月
岩手の山の
初雪の肩にせまり朝を思ひぬ

二日前に山の絵見しが
今朝になりて
にはかに恋しふるさとの山

かにかくに渋民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

山の子の
山を思ふがごとくにも

こころみに
いとけなき日の我となり
物言ひてみむ人あれと思ふ

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

知らぬ家たたき起して

かなしき時は君を思へり

ふるさとの土をわが踏めば
何がなしに足軽くなり
心重れり

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聴きし雀の鳴
くを
三年聴かざり

やまひある獣のごとき
わがこころ
ふるさとのこと聞けばおとなし
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ

ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて

ただ一人

かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の

露台の

欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を

小奴といひし女の

やわらかき

耳朶なども忘れがたかり

よりそひて

深夜の雪の中に立つ

女の石手のあたたかさかな

かなしみの強くいたらぬ

さびしさよ

わが見のからだ冷えてゆけども

夜おそく

つとめ先よりかへり来て

今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に

あたらしく

息吸ひそめし赤坊のあり

わがこころ

けふもひそかに泣かむとす

はじめて友にうち明けし夜のこと

など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て

あまたたび夢にみし人が

切になつかし

かくばかり熱き涙は

初恋の日にもありきと

泣く日またなし

わが酔ひに心いためて

うたはざる女ありしが

やさびしさよ

かなしくも

夜明くるまでは残りいぬ

息きれし児の肌のぬくもり

おそ秋の空気を

三尺四方ばかり

吸ひてわが見の死にゆきしかな

二三こえ

いまはのきはに微かにも泣きしと

いふになみだ誘はる

しみじみと

物うち語る友もあれ

君のことなど語り出でなむ

友みな己が道をあゆめり

人みなが言えを持ってふかなしみ
よ墓に入るごとく

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕

うすみどり
飲めば身体が水のごと透きとほる
てふ薬はなきか

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

あさ風が電車の中に吹き入れし
柳のひと葉
手にとりて見る

神無月
岩手の山の
初雪の眉にせまり朝を思ひぬ

二日前に山の絵見しが
今朝になりて
にはかに恋しふるさとの山

かへりて眠る

何がなし
さびしくなれば出てあるく男とな
りて三月にもなれり

汪然として
ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のころよさかな

札幌に
しかして今も持てるかなしみ
かの秋われの持てゆきし

かにかくに浜民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

山の子の
山を思ふがごとくにも
かなしき時は君を思へり

ふるさとの土をわが踏めば
何がなしに足軽くなり
心重れり

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
それを聴きにゆく

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

こころみに
いとけなき日の我となり
物言ひてみむ人あれと思ふ

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聴きし雀の鳴
くを
三年聴かざり

やまひある獣のごとき
わがこころ
ふるさとのこと聞けばおとなし

盛岡の中学校の
露台の
欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のこと
など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て
あまたたび夢にみし人が
切になつかし

かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし
小奴といひし女の
やわらかき
耳朶なども忘れがたかり

わが酔ひに心いためて
うたはざる女ありしが
やさびしさよ

よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の石手のあたたかさかな

かなしみの強くいたらぬ
さびしさよ
わが見のからだ冷えてゆけども

夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

わがこころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕

うすみどり
飲めば身体が水のごと透きとほる
てふ薬はなきか

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

かりそめに忘れても見まし

かなしくも
夜明くるまでは残りいぬ
息きれし児の肌のぬくもり

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが見の死にゆきしかな

二三こえ
いまはのきはに微かにも泣きしと
いふになみだ誘はる

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

人みなが言えを持つてふかなしみ
よ墓に入るごとく
かへりて眠る

何がなし
さびしくなれば出てあるく男とな
りて三月にもなれり

汪然として
ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のこころよさかな

石だたみ

春生ふる草に埋るるがごと

札幌に

しかして今も持てるかなしみ
かの秋われの持てゆきし

札幌に

しかして今も持てるかなしみ
よりそひて

深夜の雪の中に立つ
女の石手のあたたかさかな

かなしみの強くいたらぬ
さびしさよ
わが見のからだ冷えてゆけども

夜おそく

つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に

あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

しみじみと

物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ
いとけなき日の我となり
物言ひてみむ人あれと思ふ

目さまして猶起き出でぬ見の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

こころみにわが酔ひに心いためて
うたはざる女ありしが
やさびしさよ

かなしくも
夜明くるまでは残りいぬ
息きれし児の肌のぬくもり

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが見の死にゆきしかな

二三こえ
いまはのきはに微かにも泣きしと
いふになみだ誘はる

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて
ただ一人

かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の

露台の

欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を

はじめて友にうち明けし夜のこと

など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て

あまたたび夢にみし人が

切になつかし

夜おそく

つとめ先よりかへり来て

今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に

あたらしく

息吸ひそめし赤坊のあり

しみじみと

物うち語る友もあれ

夜おそく

つとめ先よりかへり来て

今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に

あたらしく

息吸ひそめし赤坊のあり

わがころ

けふもひそかに泣かむとす

かくばかり熱き涙は

初恋の日にもありきと

泣く日またなし

かなしみの強くいたらぬ

さびしさよ

わが児のからだ冷えてゆけども

おそ秋の空気を

三尺四方ばかり

吸ひてわが児の死にゆきしかな

二三こえ

君のことなど語り出でなむ

おそ秋の空気を

三尺四方ばかり

吸ひてわが児の死にゆきしかな

二三こえ

いまはのきはに微かにも泣きしと

いふになみだ誘はる

しみじみと

物うち語る友もあれ

君のことなど語り出でなむ

友みな己が道をあゆめり

人みなが言えを持ってふかなしみ
よ墓に入るごとく

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕

うすみどり
飲めば身体が水のごと透きとほる
てふ薬はなきか

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

札幌に
しかして今も持てるかなしみ
かあさ風が電車の中に吹き入れし
柳のひと葉
手にとりて見る

神無月
岩手の山の
初雪の肩にせまり朝を思ひぬ

二日前に山の絵見しが
今朝になりて
にはかに恋しふるさとの山

かにかくに渋民村は恋しかり

かへりて眠る

何がなし
さびしくなれば出てあるく男とな
りて三月にもなれり

汪汪として
ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のころよさかな

おもひでの山
おもひでの川

やはらかに柳あをめる
北上の岸边目に見ゆ
泣けとごとくに

山の子の
山を思ふがごとくにも
かなしき時は君を思へり

ふるさとの土をわが踏めば
何がなしに足軽くなり
心重れり

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな
ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聴きし雀の鳴
くを

こころみに
いとけなき日の我となり
物言ひてみむ人あれと思ふ

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

わがこころ

三年聴かざり

やまひある獣のごとき
わがこころ
ふるさとのこと聞けばおとなし

盛岡の中学校の
露台の
欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のこ
など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て
あまたたび夢にみし人が
切になつかし

かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし
の秋われの持てゆきし

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ
けふもひそかに泣かむとす

友みな己が道をあゆめり

誰が見ても

われをなつかしくなるごとき

長き手紙を書きたき夕

うすみどり

飲めば身体が水のごと透きとほる

てふ薬はなきか

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ

心はかなし

かくれ家もなし

かりそめに忘れても見まし

石だたみ

春生ふる草に埋るるがごと

札幌に

しかして今も持てるかなしみ

目さまして猶起き出でぬ児の癖は

かなしき癖ぞ

母よ咎むな

知らぬ家たたき起して

遁げ来るがおもしろかりし

昔の恋しさ

われと共に

小鳥に石を投げて遊ぶ

後備大尉の子もありしかな

人みなが言えを持つてふかなしみ

よ墓に入るごとく

かへりて眠る

何がなし

さびしくなれば出てあるく男とな

りて三月にもなれり

茫然として

ああ酒のかなしみぞ我に来れる

立ちて舞ひなむ

ただひとり泣かまほしさに

来て寝たる

宿屋の夜具のこころよさかな

そのかみの神童の名の

かなしさよ

ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて

ただ一人

かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の

露台の

欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を

はじめて友にうち明けし夜のこ

など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て

あまたたび夢にみし人が
切になつかし

かくばかり熱き涙は
小奴といひし女の
やわらかき
耳朶なども忘れがたかり

よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の石手のあたたかさかな

かなしみの強くいたらぬ
さびしさよ
わが児のからだ冷えてゆけども

夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

わがこころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

人みなが言えを持つてふかなしみ
よ目さまして猶起き出でぬ児の癖
は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

初恋の日にもありきと
泣く日またなし

わが酔ひに心いためて
うたはざる女ありしが
やさびしさよ

かなしくも
夜明くるまでは残りいぬ
息きれし児の肌のぬくもり

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが児の死にゆきしかな

二三こえ
いまはのきはに微かにも泣きしと
いふになみだ誘はる

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の
露台の
欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のこと
など思ひ出づる日
よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の石手のあたたかさかな

かなしみの強くいたらぬ
さびしさよ
わが児のからだ冷えてゆけども

夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

わがこころ
けふもひそかに泣かむとす

その昔揺籃に寝て
あまたたび夢にみし人が
切になつかし

かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし
小奴といひし女の
やわらかき
耳朶なども忘れがたかり

わが酔ひに心いためて
うたはざる女ありしが
やさびしさよ
かなしくも
夜明くるまでは残りいぬ
息きれし児の肌のぬくもり

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが児の死にゆきしかな

二三こえ
いまはのきはに微かにも泣きしと
いふになみだ誘はる

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

友みな己が道をあゆめり

人みなが言えを持つてふかなしみ
よ墓に入るごとく

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕

うすみどり
飲めば身体が水のごと透きとほる
てふ薬はなきか

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

札幌に
しかして今も持てるかなしみ
かの秋われの持てゆきし
札幌に
しかして今も持てるかなしみ

墓に入る
おもひでの川

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

山の子の
山を思ふがごとくにも

かへりて眠る

何がなし
さびしくなれば出てあるく男とな
りて三月にもなれり

汪然として
ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のころよさかな

かなしき時は君を思へり

ふるさとの土をわが踏めば
何がなしに足軽くなり
心重れり

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聴きし雀の鳴
くを

三年聴かざり

やまひある獣のごとき
わがこころ

こころみに
いとけなき日の我となり
物言ひてみむ人あれと思ふ

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

わがこころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき

ふるさとのこと聞けばおとなし

盛岡の中学校の
露台の
欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のこと
など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て
あまたたび夢にみし人が
切になつかし

かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし
の秋われの持てゆきし

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

人みなが言えを持つてふかなしみ
よ墓に入るごとき
かへりて眠る

長き手紙を書きたき夕

何がなし

さびしくなれば出てあるく男となりて三月にもなれり

うすみどり

飲めば身体が水のごと透きとほる
てふ薬はなきか

汪然として

ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のこころよさかな

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて
ただ一人

札幌に

しかして今も持てるかなしみ

かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

露台の

欄干に最一度我を倚らしめ

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

わが恋を

はじめて友にうち明けし夜のこと
など思ひ出づる日

われと共に

小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

その昔揺籃に寝て

あまたたび夢にみし人が
切になつかし

そのかみの神童の名の
かなしさよ

かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし

小奴といひし女の

やわらかき

耳朶なども忘れがたかり

わが酔ひに心いためて

よりそひて

深夜の雪の中に立つ

女の石手のあたたかさかな

かなしみの強くいたらぬ

さびしさよ

わが見のからだ冷えてゆけども

夜おそく

つとめ先よりかへり来て

今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に

あたらしく

息吸ひそめし赤坊のあり

わがこころ

けふもひそかに泣かむとす

友みな己が道をあゆめり

人みなが言えを持ってふかなしみ

よ目さまして猶起き出でぬ見の癖

は

かなしき癖ぞ

母よ咎むな

知らぬ家たたき起して

遁げ来るがおもしろかりし

昔の恋しさ

うたはざる女ありしが

やさびしさよ

かなしくも

夜明くるまでは残りいぬ

息きれし児の肌のぬくもり

おそ秋の空気を

三尺四方ばかり

吸ひてわが見の死にゆきしかな

二三こえ

いまはのきはに微かにも泣きしと

いふになみだ誘はる

しみじみと

物うち語る友もあれ

君のことなど語り出でなむ

われと共に

小鳥に石を投げて遊ぶ

後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の

かなしさよ

ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて

ただ一人

かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の

露台の

欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を

はじめて友にうち明けし夜のこと
など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て

あまたたび夢にみし人が
切になつかし

かくばかり熱き涙は

よりそひて

深夜の雪の中に立つ
女の石手のあたたかさかな

かなしみの強くいたらぬ

さびしさよ

わが見のからだ冷えてゆけども

夜おそく

つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に

あたらしく

息吸ひそめし赤坊の

わがこころ

けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

誰が見ても

われをなつかしくなるごとき

初恋の日にもありきと

泣く日またなし

小奴といひし女の

やわらかき

耳朶なども忘れがたかり

わが酔ひに心いためて

うたはざる女ありしが
やさびしさよ

かなしくも

夜明くるまでは残りいぬ

息きれし児の肌のぬくもり

おそ秋の空気を

三尺四方ばかり

吸ひてわが見の死にゆきしかな

二三こえ

いまはのきはに微かにも泣きしと
いふになみだ誘はる

しみじみと

物うち語る友もあれ

君のことなど語り出でなむ

人みなが言えを持つてふかなしみ

よ墓に入るごとき

かへりて眠る

長き手紙を書きたき夕

何がなし

さびしくなれば出てあるく男となりて三月にもなれり

うすみどり

飲めば身体が水のごと透きとほる
てふ薬はなきか

汪然として

ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のこころよさかな

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

しかして今も持てるかなしみ

二三こえ

いまはのきはに微かにも泣きしと
いふになみだ誘はる

札幌に

しかして今も持てるかなしみ
かの秋われの持てゆきし

札幌に

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

しみじみと

物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

わがこころ

けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

知らぬ家たたき起して

遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

人みなが言えを持つてふかなしみ
よ目さまして猶起き出でぬ見の癖
は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

われと共に

小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ

ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて

ただ一人

かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の

露台の

欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を

はじめて友にうち明けし夜のこと

など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て

よりそひて

深夜の雪の中に立つ

女の石手のあたたかさかな

かなしみの強くいたらぬ

さびしさよ

わが見のからだ冷えてゆけども

夜おそく

つとめ先よりかへり来て

今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に

あたらしく

息吸ひそめし赤坊の

わがこころ

けふもひそかに泣かむとす

あまたたび夢にみし人が

切になつかし

かくばかり熱き涙は

初恋の日にもありきと

泣く日またなし

小奴といひし女の

やわらかき

耳朶なども忘れがたかり

わが酔ひに心いためて

うたはざる女ありしが

やさびしさよ

かなしくも

夜明くるまでは残りいぬ

息きれし児の肌のぬくもり

おそ秋の空気を

三尺四方ばかり

吸ひてわが見の死にゆきしかな

二三こえ

いまはのきはに微かにも泣きしと

いふになみだ誘はる

しみじみと

物うち語る友もあれ

君のことなど語り出でなむ

友みな己が道をあゆめり

人みなが言えを持つてふかなしみ
よ墓に入るごとく

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕

うすみどり
飲めば身体が水のごと透きとほる
てふ薬はなきか

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

札幌に
しかして今も持てるかなしみ
うすみどり
飲めば身体が水のごと透きとほる
てふ薬はなきか

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

札幌に

かへりて眠る

何がなし
さびしくなれば出てあるく男とな
りて三月にもなれり

汪然として
ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のころよさかな

かの秋われの持てゆきし
札幌に
しかして今も持てるかなしみ

汪然として
ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のころよさかな

しかして今も持てるかなしみ
かの秋われの持てゆきし
札幌に

しかして今も持てるかなしみ

こころみにわが酔ひに心いためて
よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の石手のあたたかさかな

かなしみの強くいたらぬ
さびしさよ
わが見のからだ冷えてゆけども

夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ
いとけなき日の我となり
物言ひてみむ人あれと思ふ

目さまして猶起き出でぬ見の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

うたはざる女ありしが
やさびしさよ
かなしくも
夜明くるまでは残りいぬ
息きれし児の肌のぬくもり

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが見の死にゆきしかな

二三こえ
いまはのきはに微かにも泣きしと
いふになみだ誘はる

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の
露台の
欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を

はじめて友にうち明けし夜のこと
など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て
あまたたび夢にみし人が
切になつかし

かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ見を抱けるかな
十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

しみじみと
物うち語る友もあれ
夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

わがこころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき

泣く日またなし

かなしみの強くいたらぬ
さびしさよ
わが児のからだ冷えてゆけども

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが児の死にゆきしかな

二三こえ

君のことなど語り出でなむ

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが児の死にゆきしかな

二三こえ

いまはのきはに微かにも泣きしと
いふになみだ誘はる

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

人みなが言えを持つてふかなしみ
よ墓に入るごとく
かへりて眠る

長き手紙を書きたき夕

何がなし

さびしくなれば出てあるく男とな
りて三月にもなれり

うすみどり
飲めば身体が水のごと透きとほる
て心薬はなきか

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

札幌に
しかして今も持てるかなしみ
かあさ風が電車の中に吹き入れし
柳のひと葉
手にとりて見る

神無月
岩手の山の
初雪の眉にせまり朝を思ひぬ

二日前に山の絵見しが
今朝になりて
にはかに恋しふるさとの山

かにかくに渋民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川

やはらかに柳あをめる

汪汪として
ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のころよさかな

北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

山の子の
山を思ふがごとくにも
かなしき時は君を思へり

ふるさとの土をわが踏めば
何がなしに足軽くなり
心重れり

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聴きし雀の鳴
くを
三年聴かざり

やまひある獣のごとき

わがこころ

こころみに

いとけなき日の我となり

物言ひてみむ人あれと思ふ

目さまして猶起き出でぬ児の癖は

かなしき癖ぞ

母よ咎むな

知らぬ家たたき起して

遁げ来るがおもしろかりし

昔の恋しさ

われと共に

小鳥に石を投げて遊ぶ

後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の

かなしさよ

ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて

ただ一人

かの城址に寝に行きしかな

わがこころ

けふもひそかに泣かむとす

友みな己が道をあゆめり

誰が見ても

ふるさとのこと聞けばおとなし

盛岡の中学校の

露台の

欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を

はじめて友にうち明けし夜のこと

など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て

あまたたび夢にみし人が

切になつかし

かくばかり熱き涙は

初恋の日にもありきと

泣く日またなし

の秋われの持てゆきし

十月の朝の空気に

あたらしく

息吸ひそめし赤坊のあり

しみじみと

物うち語る友もあれ

君のことなど語り出でなむ

人みなが言えを持つてふかなしみ

よ墓に入るごとく

かへりて眠る

われをなつかしくなるごとき

長き手紙を書きたき夕

何がなし

うすみどり

飲めば身体が水のごと透きとほる
てふ薬はなきか

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

札幌に
しかして今も持てるかなしみ

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

さびしくなれば出てあるく男とな
りて三月にもなれり

汪然として
ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のころよさかな

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の
露台の
欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のこと
など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て
あまたたび夢にみし人が
切になつかし

かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし

小奴といひし女の
やわらかき
耳朶なども忘れがたかり

よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の石手のあたたかさかな

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の
わがころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

わが酔ひに心いためて
うたはざる女ありしが
やさびしさよ

露台の
欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のこと
など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て
あまたたび夢にみし人が
切になつかし

かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし
の秋われの持てゆきし

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

人みなが言えを持つてふかなしみ
よ墓に入るごとく
かへりて眠る

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕

うすみどり
飲めば身体が水のごと透きとほる
てふ薬はなきか

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

札幌に
しかして今も持てるかなしみ

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ

何がなし
さびしくなれば出てあるく男とな
りて三月にもなれり

汪然として
ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のころよさかな

ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて
ただ一人

かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の
露台の
欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のこ
など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て
あまたたび夢にみし人が
切になつかし

かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし

小奴といひし女の
やわらかき
耳朶なども忘れがたかり

よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の石手のあたたかさかな

かなしみの強くいたらぬ
さびしさよ
わが見のからだ冷えてゆけども

夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

わがこころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

人みなが言えを持つてふかなしみ
よ目さまして猶起き出でぬ見の癖
は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

わが酔ひに心いためて
うたはざる女ありしが
やさびしさよ

かなしくも
夜明くるまでは残りいぬ
息きれし見の肌のぬくもり

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが見の死にゆきしかな

二三こえ
いまはのきはに微かにも泣きしと
いふになみだ誘はる

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

盛岡の中学校の
露台の
欄干に最一度我を倚らしめ

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のこと
など思ひ出づる日

その昔揺籃に寝て
あまたたび夢にみし人が
切になつかし
よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の石手のあたたかさかな

かなしみの強くいたらぬ
さびしさよ
わが見のからだ冷えてゆけども

夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ見を抱けるかな

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

わがこころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき

かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし
小奴といひし女の
やわらかき
耳朶なども忘れがたかり

わが酔ひに心いためて
うたはざる女ありしが
やさびしさよ
かなしくも
夜明くるまでは残りいぬ
息きれし児の肌のぬくもり

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが見の死にゆきしかな

二三こえ
いまはのきはに微かにも泣きしと
いふになみだ誘はる

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

人みなが言えを持つてふかなしみ
よ墓に入るごとく
かへりて眠る

長き手紙を書きたき夕

何がなし

さびしくなれば出てあるく男となりて三月にもなれり

うすみどり

飲めば身体が水のごと透きとほる
てふ薬はなきか

汪然として

ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のこころよさかな

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

しかして今も持てるかなしみ
かの秋われの持てゆきし
札幌に

札幌に

しかして今も持てるかなしみ
墓に入る
おもひでの川

かなしき時は君を思へり

ふるさとの土をわが踏めば
何がなしに足軽くなり
心重れり

やはらかに柳あをめる
北上の岸边目に見ゆ
泣けとごとくに

ふるさとの訛なつかし
駐車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

山の子の

山を思ふがごとくにも